I　薬学妘㋩盍　靿

また、附属薬用植物園、医学部附属病院薬剤部、分子細胞生物学研究所（１部門）、医科学研究所（１部門）も薬学系研究科を主たる担当としており、本研究科及び学部の研究・教育を担当している。さらに、医学系研究科、理学系研究科、新領域創成科学研究科、分子細胞生物学研究所及び医科学研究所から合計９名の教授、准教授が本研究科を副担当としており、本研究科及び学部の研究・教育に協力している。

［想定する関係者とその期待］

世界の薬学の学界が関係者であり、一流の研究成果の実現、研究の交流を期待している。また、基礎生命科学から臨床医学までを含めた関連学術団体や製薬企業を始めとする産業界も、関係者として、医薬の創製、基盤構築並びに適正使用の指針確立への研究成果の還元を期待している。

Ⅱ　分析項目ごとの水準の判断

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

(１)観点ごとの分析

観点　研究活動の実施状況

（観点に係る状況）

本研究科では、薬学分野における様々な研究活動を推進し、未踏研究分野の開拓にも積極的に取り組み、以下のような実績を上げている。

① 論文・著書等の研究業績や学会での研究発表等の状況（資料 10－３：研究発表数）[redacted]

2004 年度以降、毎年 400 件程度の著書や研究論文を著しており（一教室当たりにすると年間平均 15～16 件程度）、査読過程を経ての学術雑誌発表がその半数以上を占め、法人化以降極めて高い水準を維持し[redacted]の発表のうち 60%以上は世界最高水準の研[redacted]活動を行うために、国外の学術雑誌に英文で発表している。

全研究発表のうち、約５％（各年度 1,100～1,200 件[redacted]後の研[redacted]発表の内 60 件程度）は本研[redacted]及び他部局の[redacted]、また約 20%は産業界を含めた学外研究[redacted]

④　国際交流

世界水準の研究活動の一環として、積極的に国際共同研究契約や国際 MTA(成果有体物提供契約)の締結並びに外国人によるセミナー開催を推進している（資料 10－６：国際交流状況）。Louis J. Ignarro 氏（2004 年 10 月）や Kurt Wüthrich 氏（2008 年１月）など、ノーベル賞受賞者による記念講演も積極的に開催している。

⑤　研究資金の獲得状況

研究を支える研究資金は、基礎的な運営費交付金によるものの他、21 世紀 COE プログラム（別添資料 10－３：21 世紀 COE プログラムの概要、

⑥　学会並びに日本学[illegible]議[illegible]

本研究[illegible]は、学[illegible]会[illegible]し、当該研究領域の発[illegible]IP[illegible]さ[illegible]学会組織委員、学会[illegible]質[illegible]5：学会組織委[illegible]1[illegible]学会誌編集委[illegible]等と[illegible]る[illegible]多く、研究者[illegible]関[illegible]学[illegible]会員等）[illegible]

（資料 1[illegible]日本学[illegible]

氏　名						期
堅田　利明	第 10 回国際[illegible]生[illegible]会議[illegible]					2[illegible]15 2[illegible]31
堅田　利明	運[illegible]会[illegible]					20[illegible]7 20[illegible]年[illegible]
堅田　利[illegible]	[illegible]					200[illegible]年 200[illegible]0
柴崎　正[illegible]	第 25 回天然[illegible]際[illegible]生物多様性国際会[illegible]会委員					20[illegible] 2007 年 3[illegible]
柴崎　正[illegible]	[illegible]員[illegible]					2005 年 1[illegible] 2011 年 9 月
嶋田　一[illegible]	[illegible]携[illegible]					2006 年 8 月 2008 年[illegible]
杉山　雄[illegible]	[illegible]連携[illegible]					2006 年[illegible] 15 日 2011 年[illegible]30[illegible]
松木　[illegible]	[illegible]					

観点　大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に

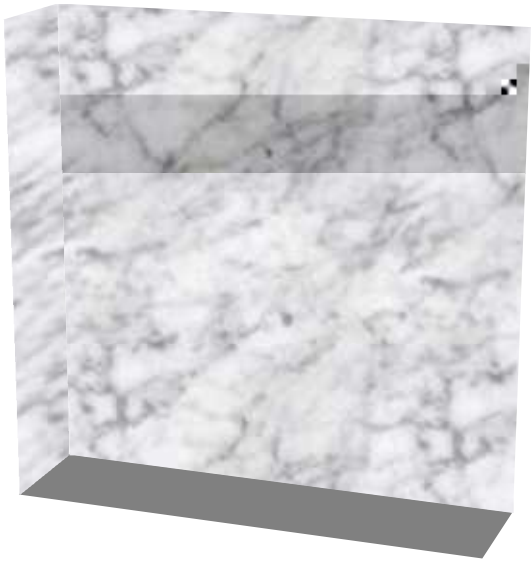
分析項目Ⅱ　研究成果の状況

(１)観点ごとの分析

観点　研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること㋐　鏐靚㋑

ことによって、充実した研究スタッフを整える努力を継続的に行っている（資料 10－12：研究スタッフ数（実員）の推移）。

研究設備面では、設備投資に用いることができる運営費交付金額が減少傾向にある中､研究設備は教員の努力によって、主として競争的研究資金により、各種先端機器類を設置し、研究の進展に大きく貢献している（資料 10－13：研究設備投資額の推移）。また、2005 年度には、外部からの寄附金により新棟が完成し、さらなる研究環境の整備を行った。

この結果、前述のように論文・著書等の研究業績や学会での研究発表等の状況（資料 10－３、P10－４）、共同研究、受託研究の状況（資料 10－５、P10－５）、研究資金の獲得状況（資料 10－８、P10－５）､代表的研究者の論文引用回数の年度別推移（資料 10－11、P10 -9）等にみられる高い研究水準の維持が可能となっている。

（資料 10－13：研究設備投資額の推移）